
ぱっくとうねいちゃあ

黒井京

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ばつくとうないちゃあ

【Nコード】

N9649X

【作者名】

黒井 京

【あらすじ】

この世界には二種類の人間が存在している。

何の特別の力を持たない、極々普通の人間。

もう一つは、特殊な力を持った、少々普通の人と異なる外見を保持した異人。

圧倒的な個体数を持つ、人間の社会に溶け込むように異人は生活をしてきた。その存在すらを認知していない人間すらいるほどに、彼らは環境に適応していた。

それは、生活面だけでなく、子孫を残すことに関しても同じ現象が起きていた。徐々に異人の血は薄れていき、その力も限定的なものに収まってきている。そう、異人が人間と同化してきているのだ。考古学者を父に持つ、犬飼^{いぬかい} 猛^{たけ}は、獣人の血を引いている義妹の望^{のぞみ}がいることを除いては、一般的な男子高校生だった。そんな猛の元に戻ってきたのは吸血鬼の狭霧^{はさぎり} 鏡^{かがみ}。吸血衝動を抑えるのが苦手で、少々私生活に難があった。父に、彼女の世話を任せられた猛の生活は大きく変化していくのだった。

プロローグ（前書き）

この物語はフィクションであり、
実在の人物及び団体とは一切関係
ありません

プロローグ

事實は小説より奇なりとはよく言ったものである。不思議というものは意外なほど簡単に転がっているものである。

と、我が義妹と対面しながらたった二人の食卓を営んでいるところである。

俺は、犬飼猛。妹の名前は望である。近所の高校に通うちょっと変わった兄妹とでも言っておこう。

よく気が回るし、料理も上手で家事もママというよくできた妹である。身内の鼻窟目を差し引いたとしても、かなり可愛い女の子と誇れるだろう。平均から程よく小さい身長は可愛らしさを助長させているし、ぱっちりとした目元に柔らかそうな唇は魅力的だろう。長い髪を二つの尻尾にみたて、左右対称にまとめたツインテールは快活な妹によくあつた髪形だと思う。ただし、多少胸は小さいが。

ところで妹には、一目で見て分かる特異点がある。それは、頭の両側にある人ならざる耳であつた。獣耳とでも言えればいいのだろうか、犬耳と表現するのが適切なのだろうか。ともかく、その辺りはその筋に精通した人間が答えるべきだろう。

「どう、お兄ちゃん？ 今日の晩御飯はちょっと自信があるんだけど……」

「ああ、おいしいよ」

そんな月並みの返事をしつつ、説明を続けよう。

この世界には、ひっそりと暮らす異形の人間が存在する。知識ある人間からは異人と呼ばれているそうだ。あまり世間には周知されていないのはその血が段々と薄まってきている傾向があるからだ。

我が妹も、月が満ちる三日前後くらの夜にしかこの症状は発生しないのだ。今日はちょうどその満月の日であつた。

一般的に伝説として扱われている異人も実際にいるんだと、考古学者の父は語っていた。そんな父に育てられた俺は、こうして妹のちよつと変わった姿も何の抵抗もなく受け入れられた。そもそも、この娘を連れてきたのは父だが。

「今日は日曜日だからいいけど、明日からは平日なんだから気をつけるよ」

「ん、りょーかいですよ」

理解をしてくれる人は少なからずいるだろうが、一般から見たら気味が悪いだろう。まあ、中にはこういうのが好みのマニアックな方もいるだろうが、そればかりではないからな。

「家にはまっすぐ帰って来いよ。暗くなったあとに、何か欲しいものがあれば俺が買ってきてやるからな」

「うん、いつもありがとうね」

「いや、感謝を言うのはこっちさ、家事とかほとんど押し付けちゃってるからな」

「それでも、こうして普通に暮らせてられるのはお兄ちゃんのおかげなんだよ?」

「はは、そこまで大げさに言わなくていいさ」

こうして、些細なことにもいちいちお礼を言ってくれる。本当にできていた妹だよまったく。

「あつ、そうそうお兄ちゃん。明日から転校生が来るらしいよ?」

「転校生、どうしてまたこんなタイミングに?」

もうすでに、4月の第一週が終わってしまっ日付。始業式、入学式と学校のスケジュールが着々と進められて、新しいクラスでも交

流の輪が形成されていてもおかしくない。

「私達と同じ学年みたいだけど、どんな人なんだろうね？」

「さあな、どうせそんな関わり合いになることだってないさ」

このときはまだ対岸の火事だろうと傍観を決め込んでいたが、世の中そう上手にいかないものである。

事実は小説より奇なりという言葉の重みを実感することとなったのだ。

第一話 ファーストコンタクト

「お兄ちゃん、おはようだよ！」

俺の部屋の扉を勢いよく開いてやってきた妹は、片手にフライパン、学校の制服の上にエプロンとまあテンプレみたいな格好で朝のお披露目となった。ちなみに、昨日の夜に見られた獣耳はしっかりと収まっている。

「起きてるよ、別に朝弱いわけじゃないんだからこんなことしなくてもいいんだぞ」

「えー、そんなこといつて月に1回は寝坊しそうにならない？」

「いや、多少の寝坊で遅刻する時間を習慣にしているわけじゃないだろ？」

今だって、朝の六時とかなり早起きの部類になる。ここから一時間程、起きるのが遅れたとしても、余裕で始業の時間に合うだろう。

「むー、いいじゃん。私の朝練の時間に合うようにしてくれてるんでしょ？」

「そうだけど、別にわざわざ手間を増やしてまで確実にしなくてもいいだろ？」

妹は女子サッカー部に所属している。去年は一年生ながらレギュラーとして活躍しているみたいだ。俺はサッカーにあまり詳しくないので、細かく説明できないので割愛させてもらう。

「いいの！一緒にいきたいって言ったのは私だし、お兄ちゃんは

良いつて了承してくれたじゃん」

「まあな……」

しかし、本音を言うところなのに早く学校に行っても何もすることがないのが辛いのだ。大体は、自分の机に突っ伏して寝ているのが関の山だ。俺が真面目な学生なら、一生懸命、授業の予習復習をしたりするのだろうが、現実にそんな奴はあまりいない。進学校でもない、そこそこのありきたりな高校だからな。

「はい、文句を言っていないで、さっさと着替えて朝ごはんにしよ！」

「分かったよ。言われた通り着替えるから、部屋を出てくれ」

「はいはい、別に私は平気なだけだね」

「いいから出てけ！」

もうちょっと、恥じらいというのを持って欲しいのだが。年頃の男女が一緒に暮らしているのだ。少々、妹はそのあたり無頓着すぎると思う。仮にも、義理の兄弟なんだ。間違いがあつたら父に示しが見つからない。

文句を言いながらも、最後は俺の言葉に従ってくれた。さて、気を取り直して手早く着替えてしまおう。

「転校生か」

俺だって、多少の野次馬根性はある。どんな人間か気にならないわけがない。一学年六クラスの我が学校。妹とはクラスが違うので、どちらかのクラスに所属する確率は低いわけではない。

「同じクラスになったら考えれば良いことか」

そう思考に結論付けたころには、寝巻きはきちんとたたまれ、身を包み衣服は詰襟の学生服となっていた。

*

「それじゃあ、お兄ちゃんいつてくるね！」

「ああ、また昼にな」

グラウンドの向こう側にある部室棟へと元気良く駆け出ししていく妹を見送って、俺は昇降口へと向かった。寝足りない、睡眠欲を満たすために、さっさと教室に行こう。

「ん？」

開けっ放しとなっている、自分のクラスの下駄箱を見て疑問に思う。

「あれ？　ここって使われていない場所じゃないのか？」

そう、三日前の金曜日まではここを使用している生徒はいなかった。つまり、誰かこの下駄箱を必要とする人物が現れているということ。話の展開からおそらく転校生が俺のクラスにやってくるのだろう。

「ふーん」

大きい期待をしていたわけでもないのに、大喜びすることもない。へえー、そうなんだと多少の関心を寄せる程度の感想。

「逃げるわけでもないんだしな」

若干、重く感じるまぶたを擦りながら上履きに履き替えた足を動かす。数分もたたずに、自分の教室へたどり着くだろう。

と、そこまではよかった。俺は、教室の扉を開けた瞬間に目の前の光景が信じられずに、扉に往復運動をさせてしまった。

「いや、おかしいだろ」

教室においての、俺の机のポジションは日当たりのいい窓より二列目の後ろから三番目。日差しが程よく差し込むという、夏なら厄介、その他の季節は大歓迎という割りとお好立地。

その良物件に先客が居座っていたのだ。いや、居座っていたというより、突っ伏していると表現したほうが適切だ。おそらく、寝ているのだろう。

うちの指定のセーラー服を着ている時点で、うちの学校の女生徒であることを証明している。問題は、同じクラスの人間だとして、新クラスとなって数日たった自分の机を間違えることがあるだろうかということだ。

となると、あれは誰なんだという新しい疑問が浮かび上がってくる。顔は分からないが、長くて黒い髪は人を惹きつける何かを持っているだろう。

とりあえず、あの場所は俺にとって、朝の小さなオアシスなのだ。退いてもらわないと、本日の授業に支障をきたす恐れがある。

「おーい」

肩を揺すり、不法滞在者の目を覚まさせてあげよう。

「んん？」

どうやら本当に寝ていたようで、顔をあげたときの表情はかなり不機嫌であった。しかし、そんな状況でありながら、凜とした雰囲気気が伝わってくる彼女の顔立ちはかなりレベルの高いものなのだろう。

という感想を抱いていたところに、彼女が立ち上がったところまではよかった。突如、俺にもたれかかるように倒れこんだ。そして、俺に馬乗り状態となり、上半身を覆い被せてきた。

何が起きているのかを理解できず。彼女から漂ってくる女の香りに思考回路はショート寸前となっていた。

「な！？ な！？」

驚愕は声にならない声となるも、相手に伝わる気配はない。俺を押さえつけてくる力は強くなる一方で、俺は徐々に身動きが取れなくなってきた。

彼女の顔が近づいてくる。俺から、反抗する意思を奪うくらいの魅力を持っていた。

もうどうにでもなれ、と目を閉じた数秒後。俺の左肩にチクリと痛みが走った。衝撃に目を見開くと、彼女の口が俺の左肩を啜っていたのだ。ただ、どうして痛覚が反応しているのかを把握するには少々時間が掛かった。

「あんだ、吸血鬼だろ？ 公共の場でこんなことをしていたら駄目じゃないか！」

「！？」

寝ぼけていた彼女が、ようやく自分がしていることに気づいたらしい。

「わ、私は何を……」

「安心しろ。相手が俺でよかったな？」

本当、下手に物好きな人間が相手だったら、大変な騒ぎとなっていたかもしれない。

「ど、どういう意味だ？」

「少なくとも、俺はあんたに危害を加えるつもりはないってことだ」

まだ、思考がはっきりしていないのか、困惑の表情をしている。

「おまえは驚かないのか？」

「まったく、といえば嘘になるがな。まあ、こういうのは一度目というわけじゃないからな」

一度は妹で既に体験していたのだ。出会ったときに、妹の体質のことについて俺は知らされていなかったたので、あの時は多少は驚いた。

俺に訝しげな視線を投げかけてくる。まあ、当然といえば当然なのだろうけど、少々悲しいものがあるな。

「落ち着け、少なくとも俺はあんたら側の人間だ」

「そうなのか？」

まだ、疑心暗鬼が解け切れていないのだろう。どうにかできないものか。

「なあ、吸いたければ吸ってくれてもいいんだぞ」

「え？」

「さすがに首筋なんかは俺だって怖いし、跡が目立っても駄目だろ？ 腕とかなら、服の上からなら誰にも気づかれないうし、それであ

んたが落ち着くんなら安いもんさ」

「そ、それじゃあ」

俺が差し出した右腕にカプリと噛み付いた。再びチクツとした痛みを受けた。体の中の何かが奪われるような感覚に襲われる。吸い上げられていく何かはたぶん俺の血液なのかな。

「ありがと……」

俺の腕から口を離すと、彼女は随分しおらしくなってしまうていた。

「別に安いもんさ。もう平気か？」

腕を確認すると小さな二つの跡があった。ちよつと気をつけておこう。誰かに見つかって変な疑惑をかけられたら面倒だ。

「うん。もう大丈夫だ」

かなり意識ははつきりしているし、吸血鬼がどれくらいの頻度で血を吸うのかは分からないけど、本人の言葉を信じよう。

「すまない。情けないな、こんな醜態を晒してしまうなんて……」

相当へこんでいるのか、口調と比べて声色にまったく覇気が感じられない。

「そうだ、名前聞いてなかったけど、なんていうんだ？」

「私か？ 狭霧 鏡だ」

「俺は犬養 猛だ。よろしくな」

そう手を差し出すと、鏡はそれに応えてくれた。ぐっと握り返す力はとても強く、でも痛いわけではなく、相手を労わる気持ちも伝わってくる。

鏡の表情は柔らかく、安堵の笑みを浮かべていた。

これが、俺と鏡のファーストコンタクトだった。

第一話 ファーストコンタクト（後書き）

習作ですので、おそろく相当拙いと思われる）、・・・（

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9649x/>

ばっくとうねいちゃあ

2011年10月27日09時08分発行